

地球にECO(いーご)としよう



省エネグループ通信



今夏10年目の夏休みエコライフ・チャレンジ

「チャレンジのしかた」を改めた成果は～楽しくできました！！

このキャンペーンは、子どもたちと家族みんなが「省エネ」への理解と行動意識の向上を図ることを目的に活動してから10年が経過し、チャレンジした児童は10,446人に達しました。大震災前後には減少傾向にありましたが、今夏は1校1校細かく呼びかけをした結果、参加校16校(前年比3校増)、参加児童1,194人(前年比439人増)で7年振りに千人台を回復しました。また今回を節目に「チャレンジのしかた」をよりわかり易く改めたことで、前年に比べより成果があがりました。

【家族で話し合おう】チャレンジを機に地球温暖化や節電について家族で話し合い、協力し合った家庭が増えました。(図-1)

【結果を自分で評価してみよう】自己評価することで、“楽しかった”が“大変だった”を上回ったことや、自分のメニューを積極的に取り入れてチャレンジするなど行動意識がより一層高揚しました。(図2)、(図-3)

【電気使用量を記入しよう】普段見過ごしがちな“電気使用量のお知らせ”を改めて見直すことで、電気の使い方の工夫や節電を心がける家庭が増えています(図4)。節電量は前年比1.3%と僅かでしたが、節電への関心は高まってきました。

【CO2削減効果】7日間のチャレンジでの削減効果は1家庭当たり2.8kg-CO2でした。

“意識しなくても、自然に(エコライフが)できるようになりたいです”(児童の感想文から)

図-1 家族との協働

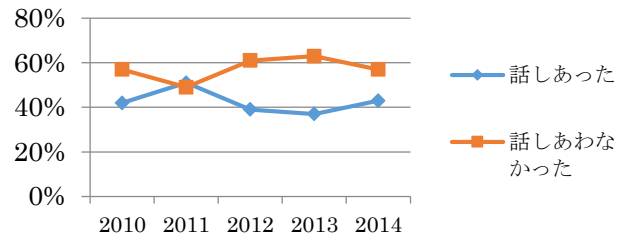


図-2 チャレンジ後の感想

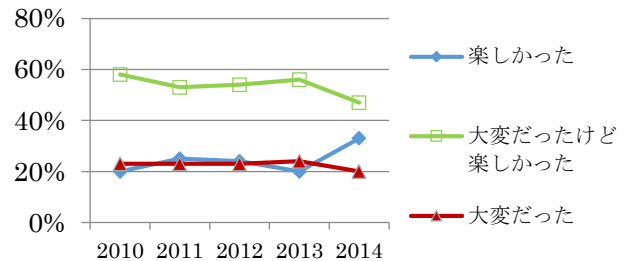


図-3 チャレンジ後の評価

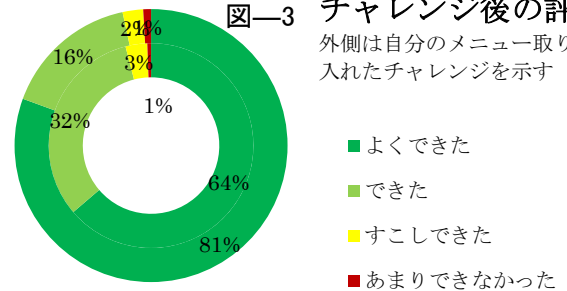
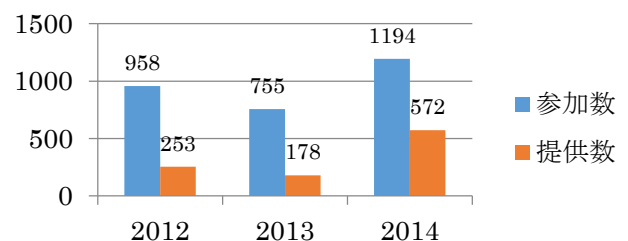


図-4 参加数と電気使用量の提供数



出前授業～東京ガスさんと体験授業～

夏休み明けの8月末から12月まで、17校で出前授業を実施しましたが、特に9校が、11月に集中するスケジュールとなりました。その中には、県・学校派遣事業で神奈川県から依頼を受けた小学校1校、県立高等学校1校が含まれています。小学校の場合には、県の「かながわ環境教室」担当部署から、環境部長はじめ3名の方が、川崎市環境局から、地球環境推進室係長はじめ2名の方とエコ暮らし未来館職員の方2名の合計7名の見学者の同席を受けての出前授業となりました。

一方、県立高等学校では、10分間の休憩を挿んだ100分



県立高等学校での出前授業

授業を実施しましたが、小学校とは、一味も二味も違う雰囲気の中での楽しい授業となりました。

各校が希望したプログラムは、「地球温暖化とは」が9校、「節電にみんなで取り組もう」が2校、「エネルギーとは」が3校、「はっぱはえらい」が3校でした。

「エネルギーとは」の体験には、新しい試みとして

東京ガス(株)との協働が実現し、日本が技術で世界をリードしている究極のクリーンなエネルギー「燃料電池」による発電体験に取り組みました。子ども達は、初めて見る燃料電池に水素を注入すると、LED電球



東京ガスさん(青のジャンパーの方)との体験授業

が点灯して電気が起きたことを確認しました。更には扇風機が回転すること、電子オルゴールを繋ぐと音楽が流れるなど、その度に歓声が出ていました。不思議な現象に興味深く取り組んでくれました。この燃料電池がたくさん採用され、クリーンなエネルギーによる地球に優しい社会が早く実現することを願う体験でした。

また、昨年に引き続き、センターからの要請を受けて自治会・町内会への環境出前講座にも取り組みました。幸区、宮前区及び麻生区の各町内会へ出向き、「地球温暖化」や「節電・省エネ」や「電気料金の仕組み」などの説明をしました。参加された方々には、真剣に聴いて頂けました。また、質問もあり、和やかな雰囲気の中で実施することが出来ました。

イベント ～参加企画テーマ“見て！触れて！感じて！”～

10～12月にはかわさき環境フォーラムなどの3ヶ所のイベントに参加し、延約500人の来訪者がありました。12月7日環境フォーラムでのブースは武蔵溝ノ口駅自由通路に置かれ、12月の日曜とあって多くの人が忙しく行き来する中、100人程の家族連れや待ち合わせの中学生が立ち寄り見学・体験をしていきました。特にノーベル賞で評判になっているLEDの経済性や持久性には改めて実感し、理解を深めたようです。また模型による燃料電池の仕組みの展示では、徐々に普及し始めた家庭用燃料電池や近く実用販売される燃料電池車、川崎で計画中的の水素発電所などの話題と相まって熱心に見学していました。

LEDも燃料電池も近い将来優れたエコ商品として広く普及してもらいたいものです。



左写真のぬいぐるみは 神奈川県の非常勤相談役「かにゃお」かわさき環境フォーラムにて、

私のエコ体験

子どもたちと楽しむ環境体験教室

川崎市地球温暖化防止活動推進員
長村 吉洋

環境のこと、エコについて、楽しく、身近に体験できるような実験・工作教室として、小学生を対象としたレモン電池実験や燃料電池実験、水の不思議体験、工作などの体験型教室を実施してみて、子どもたちがビックリしたり、歓声を上げたりしながら、体験してくれる様子を見ることは、とても楽しく嬉しいことです。小学校の出前授業では、できるだけクイズなどをやりながら、参加型にするように心がけています。



「地球温暖化について勉強しよう」とか「環境にやさしいことをしよう」とか言っても、子どもだけでなく大人にとっても、なかなかピンとこないし、何をやっていいのかわからない、特に関心が無いといった場合が多く、活動する上でどのようにしたら関心を持ってもらえるかが、一番悩むところです。地球のこととか、未来のこととか、考えてもムダだし、自分には関係ないと思っていることがほとんどなので、子どもにとっても、大人にとっても、やっぱり、面白いこと、楽しいこと、役に立つこと等、まずは関心をもってもらうことが大切ではないかと思います。やはり、楽しんでもらうためには、自分も楽しいと感ずることができないといけないと思いますし、その楽しさをどのように本当に楽しいと感ずてもらえるかがキーではないかと思います。

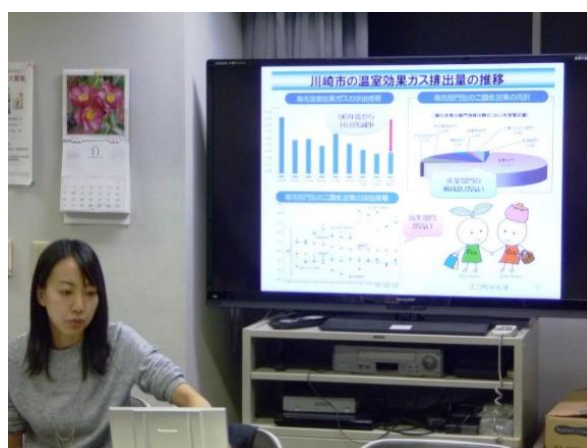


省エネグループ勉強会

今年も開催。テーマは”協働”について

省エネグループは毎年行政との勉強会を年1回開催しています。ご多忙の中で時間を工面して頂き、11月27日に川崎市環境局地球環境推進室の前田明日香様に講演して頂きました。

内容は、「川崎市の地球温暖化対策における協働の取組」でした。要約すると、①効果的に温室効果ガス排出量の削減が誘導される社会・経済システムを構築する。②再生可能エネルギー源・未利用エネルギーなど、地域に存在するエネルギー資源を有効かつ効率的に利用する。③事業者・市民・市がそれぞれの役割に応じて地域全体での温室効果ガス排出量の削減に貢献する為に協働の取組を推進する。などの内容でした。



省エネグループは市内小学生への出前授業に取り組み、既に協働の一つとして東京ガス(株)との連携をして、より良い授業を目指しています。日頃、省エネグループが行っている出前授業へのさらなる発展に繋がるとの思いを強く受けた講演でした。

CO₂削減 国際合意なるか！

IPCC第5次評価報告書を受けて

国連の気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の地球温暖化に関する第5次評価報告書の主要な結論の一つとして、「累積CO₂排出量と世界平均地上気温の上昇量は、ほぼ比例関係にある(新見解)」と記述されている。従って、この比例関係から、将来の気温上昇を抑制するために必要な世界のCO₂排出量削減の目標値を知ることができる。

国際社会は、19世紀末の工業化前と比べ2℃未満に抑えるのを目標としている(2010年、カンクン合意)。2℃未満(注1)に抑えるには、CO₂の累積排出量を3兆トンに抑える必要があり、すでに2兆トンを排出しているので、残り1兆トンである。年間300億トンほどを排出しているので、あと30年である。

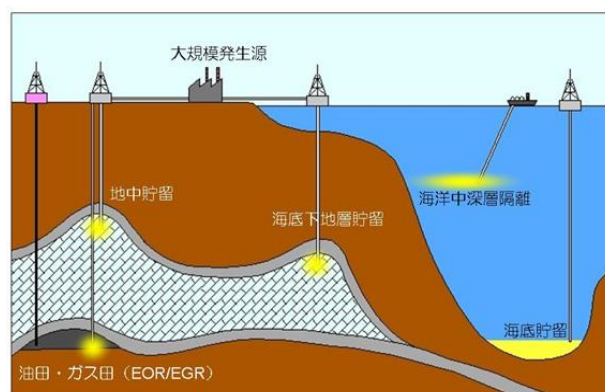
そこで、IPCCは「2℃未満に抑制する道筋は複数ある」と、具体的には、温室効果ガスの排出量を2050年に半分ほど、今世紀末にほぼゼロにする道筋を描いた。主な削減技術として、バイオ燃料やCO₂を地中に閉じ込めるCCS(注2)、原子力、風力・太陽光利用を挙げた。

現在、世界は京都議定書(2008～2012年)の

次の新たな(2020年以降)削減枠組み作りを行っており、2015年の10月1日までに、すべての国が目標案を出すことになっている。これに先立ち、京都議定書から離脱した米国と削減義務を負っていなかった中国の2大排出国が、11月に新しい削減目標を発表した。2大排出国がリーダーシップを取り、全世界が協力して削減に向かうことを期待する。

ところで我が国は、新たな目標値をまだ発表できていない。それどころか、2013年度の温室効果ガス排出量は、過去最大となった(11/4環境省発表)。原因は、原発の代わりに火力発電が増えたことによって化石燃料の消費量が増加したため。我々市民は節電・節水など小さなことしかできないが、子どもの時代、孫の時代を考えて、今すぐ行動を起こしたい。

(注2) CCS(二酸化炭素回収貯留)とは
CCSとは、産業やエネルギー関連など、大規模にCO₂を排出する工場や発電所などから比較的純粋なCO₂を隔離し、採掘し終わった油田やガス田、海底などに貯留することをいう。



(注1) 2℃未満の根拠は公表されていないようだ。

以下を総合的に判断したのだろう。

- ・2℃を超えると食料生産にマイナスの影響が出る。
- ・ティッピングポイントを考慮。(ある温度を超えると、ある現象が後戻りできない変化を起こす転換点、例えば、グリーンランドの氷床の溶解が止まらなくなる温度は、1～4℃の間にある。)

—ご意見をお寄せください—

本紙に対する、ご意見、ご要望、ご感想、更には皆様のエコ情報・体験などを下記へお寄せください。皆様と共に、地球環境を維持するため、「楽しく、かつよく、得する」エコを実践していきたいと思っています。

連絡先

川崎市地球温暖化防止活動推進センター 省エネグループ
〒213-0001 川崎市高津区溝口1-4-1 ノクティ2 高津市民館内
TEL 044-813-1313 FAX 044-813-1350
E-mail : office@kwccca.com

ホームページ : <http://syo-ene-group.sunnyday.jp/homepage/>

発行責任者: 省エネグループ代表 八木洋一

